

世田谷美術館パフォーマンスシリーズ
トランス／エントランス 特別篇

夢の解剖—猩々乱

Anatomy of the Dream: *Shojo Midare*



2021 年 10 月 5 日（火）・6 日（水）20 時～ 世田谷美術館 エントランス・ホール

演出 ルカ・ヴェジェッティ 出演 長山桂三（シテ） 観世鍔之丞（地謡） 大倉源次郎（小鼓）ほか

空間を活かした実験的なパフォーマンスシリーズ、「トランス／エントランス」

当館のエントランスを活かし、アーティストの実験的な表現の場とする「トランス／エントランス」は、2005 年以来 16 回にわたって開催してきたパフォーマンスシリーズです。回を重ねて、近年は「美術館の空間と身体との対話」というテーマが重要性を増し、それに対するアーティストの応答も多様なかたちでなされてきました。

能の時空と、イタリア人演出家のまなざしの出逢い

第 17 回は特別篇として、異色の国際コラボレーションに挑戦。コロナ禍により、約 1 年延期しての開催となる本企画では、ニューヨークを拠点に国際的に活躍し、日本文化に造詣の深いイタリア人振付家・演出家ルカ・ヴェジェッティが、能の演目「猩々乱（しょうじょうみだれ）」を美術館に招じ入れます。ヴェジェッティは 2018 年、「ブルーノ・ムナリー」展のために当館で新作パフォーマンスを創造しており、エントランス空間のつくりや音の響きについては、熟知しています。今回は能の演出をとおしてここに一種の「解剖」を施し、ふだんは隠されて見えない輝かしさを探ることになります。「猩々乱」は、海中に棲む猩々が水上で戯れ、喜びのなかで遊ぶひとときを描く夢ですが、多彩な動きも連なるこの演目を夜のエントランスに置き、ヴェジェッティによる最小限で精緻な演出を加えることで、時空を超える感覚が幾重にも増幅されるような、未知の経験の場があらわれるでしょう。



異色のコラボレーションに挑む最良のアーティストたち

主な出演者として、ヴェジェッティの良き理解者であり、積極的に能楽の活動を繰り広げる観世流シテ方の長山桂三が舞い、地謡には芸術としての能楽の声を身体全体から発する観世鍔之丞を迎えます。囃子方には、これまで約 25 か国での能公演に参加してきた大倉流小鼓方の大倉源次郎（人間国宝）を筆頭に精鋭が揃います。異色の試みを成功させ得る最良のアーティストたちが集い、能のもつ強靱な創造性が美術館の空間をすみずみまで満たすことでしょう。後日、イタリア文化会館での関連トークや、有料動画配信も予定しております。

※本事業は文化庁「ARTS for the future!」補助対象事業です。

夢の解剖——演出のためのノート

ルカ・ヴェジェッティ



撮影：堀哲平

能は驚くべき深みと複雑さをそなえた芸術である。

それゆえに普遍的な芸術の高みにそびえ立っている。能を成立させている構成部分のそれぞれに価値があり、と同時にそれらの部分が互いに支え合うという構造があって、それが能の独自性となっている。だが、本質はどこにあるのだろうか。能の形式そのものを超えていくような、ただひとつの要素とは何なのだろう。能では、鼓動がゆっくりと静まるほどに観る者が釘付けになるが、どうしてそんなことが可能なのか。

答えることができないまま、私はそれらの問いに導かれ、何年ものあいだ能という演劇の伝統に興味を持ち、学びつづけてきた。そしてついには、すばらしい能楽師の方々と接する貴重な機会にも恵まれたのである。能における謡の言葉は実に荘厳である。しかし、というべきか、それゆえに、なのかもしれないが、能とはその真髄において、演ずる者の身体が体現する芸術、つまりすべての出演者のわがが縊り合わせられる芸術なのだろうと思う。パフォーマンスそれ自体が芸術なのだ。私にはそう見える。

「夢の解剖」は、世田谷美術館とその建築のために構想されたプロジェクトである。

そこに能を置いてみせるなかで、芸術の新たな道を拓くような演劇的時空を発生させることになるだろう。今回は「猩々乱」という特定の演目を美術館のエントランス空間に招じ入れ、整える。そのように能と出逢うことで空間それ自体が変容することがいかに重大かを示しつつ、この空間の秘める輝かしさを引き出したいのである。エントランスを「解剖」というこの作業を、能の構造を司る多様な関係の網へと接続してくれるのは、照明である。能における空間や響きという変数が、世田谷美術館のエントランスというより大きなうつわに投げ入れられ、照らし出されることになる。

劇場や美術館にはさまざまな形態があり、実際の空間もさまざまだが、そのどちらも、我々の感覚や想像力が多様なレベルで働くようにしてくれる場である。ただ、その方式は通常かなり異なる。ひとつは美術館で経験するような、ゆったりと気ままに、そしてたいていの場合独りで作品と向き合うような方法である。もうひとつは劇場で経験するような、観客が集団として一点に引き込まれている集中状態というものだ。「夢の解剖」では、美術と演劇という全く対照的な性質の芸術のありように何か共通の土台があるのかどうか、また両者を取り巻く観客のエネルギーに共通するものがあるのかどうかを探ることにもなるだろう。

これは能を媒介にすることでいっそう意義深くなる試みである。能というパフォーマンスを観るには極度の集中を要し、またその結果として時間が伸縮する感覚が生まれる。能では演者はほんの数歩で数世紀もの時間を召喚し、ふたつの詞章のあいだのひと呼吸が、時には舞いの全体にわたって続くかのようなことも起こるのだ。

ルカ・ヴェジェッティ Luca Veggetti

1963 年ボローニャ生まれ、ミラノ・スカラ座附属バレエ学校で学ぶ。1990 年より振付家・演出家として活動。作品はグッゲンハイム美術館パフォーマンスシリーズ「Works&Process」、メトロポリタン美術館、マーサ・グラハム・ダンスカンパニー、パリのシテ・ドゥ・ラ・ミュージック等で制作・上演され、高い評価を得てきた。主な作品に、ヤニス・クセナキス「オレスティア」完全版米国初演（ミラー・シアターと「Works&Process」の共同制作 2008 年）、カイヤ・サーリアホ作曲のバレエ「Maa」（同 2010 年）、細川俊夫作曲のオペラ「斑女」日本初演（サントリーホール 2009 年）、同モノドラマ「大鳥」米国初演（第 1 回ニューヨークフィル・ビエンナーレ 2014 年）、原案・演出・振付担当の「左右左」（横浜能楽堂とジャパン・ソサエティ〈ニューヨーク〉の共同制作 2017 年）等。近年の仕事に、ジェローム・ロビンス作品を再読・新演出した「Watermill」（ブルックリン音楽アカデミー 2018 年）、クセナキス作曲「Kraanerg」（ボローニャ歌劇場 2018 年）、アーノルド・シェンベルグ作曲「ペレアスとメリザンド」（オーデンベルグ 2019 年）、「ベルス」（イタリア文化会館、東京 2019 年）、映像作品「For a dance never choreographed」（2021 年）、サルヴァトーレ・シャッリーノ作曲オペラ「Infinito Nero」（ボローニャ 2021 年）。美術館のための作品に、「NOTATIONOTATIONS」（ドローイング・センター、ニューヨーク 2013 年）、パフォーマンス/ビデオインスタレーション「Scenario」（MART、ロヴェレート 2016 年）、「風が吹くかぎりずっとーブルーノ・ムナーリのために」（世田谷美術館 2018 年）。



撮影：堀哲平

長山桂三 Nagayama Keizo

1976 年、観世流シテ方 故 長山禮三郎の次男として生まれ、八世観世鍬之丞（人間国宝）、九世観世鍬之丞、および父に師事。4 歳で初舞台、19 歳で「花月」にて初シテを演じる。東京を中心に全国で演能に出演するいっぽう、積極的に講座等も企画し、能楽の普及に努める。海外公演や新作能、復曲能にも多数出演。2008 年より自身の研鑽の為、「桂諷會」を発足し年 1 回の公演を主宰する。また、桂諷會を主宰し、東京（世田谷・南青山）、神奈川県（小田原）、埼玉県（熊谷）、各地で愛好者の指導にあたる。世田谷長山能舞台（世田谷区上野毛）にて、能楽ビギナー向けの鑑賞講座、謡・仕舞体験講座など様々な活動を精力的に展開する、新進気鋭の若手能楽師。重要無形文化財総合指定保持者。



観世鍬之丞 Kanze Tetsunojo

1956 年、観世流シテ方 八世観世鍬之丞（人間国宝）の長男として生まれ、伯父の観世寿夫および父に師事。4 歳で初舞台。2002 年、九世鍬之丞を襲名。2008 年日本芸術院賞受賞。2011 年紫綬褒章受章。公益社団法人鍬仙会代表理事。公益社団法人能楽協会理事長。これまで菅原道真やポール・クロードル、ショパンを題材にした新作能、またアウシュヴィッツと東日本大震災犠牲者の鎮魂をテーマにした新作能でシテを勤めるなど、古典作品以外にも意欲的に取り組む。その他、映画出演や声明との共演、武満徹の現代音楽とのコラボレーション作品やベケット生誕 100 周年イベントへの参加、パリ・オペラ座 350 周年作品のイエイツ原作「鷹の井戸」に出演するなど、古典を超えた世界でも幅広く活躍。重要無形文化財総合指定保持者。



大倉源次郎 Okura Genjiro

1957 年、大倉流十五世宗家大倉長十郎の次男として生まれる。64 年、独鼓「鮎之段」にて初舞台。85 年、能楽小鼓方大倉流十六世宗家継承。通常の能公演はもとより、誰もが能に気軽に出会えるよう「能楽堂を出た能」をプロデュース、「近鉄アート館能」「六甲アイランド能」「叶匠寿庵薪能」などを制作。新作能、復曲能にも多く参加。海外公演ではこれまでパリ、ニューヨーク、ローマ、モスクワ、デリーほか 25 ケ国の諸都市にてのべ 30 ツアー以上に参加。子供向けの能楽体験講座なども各地で開催。能楽のふるさと、奈良・多武峰での「談山能」も企画開催。2017 年に重要無形文化財保持者となる。著書に『大倉源次郎の能楽談義』（淡交社）、『能から紐解く日本史』（扶桑社）がある。



世田谷美術館パフォーマンスシリーズ

トランス／エントランス特別篇「夢の解剖——猩々乱」

日時 2021年10月5日(火)・6日(水)20時開演(20時45分終演予定)

会場 世田谷美術館 エントランス・ホール

定員 各回とも40名程度 料金 web予約 一般のみ5,000円(当日券なし)

予約 2021年9月28日(火)12時～ 予約サイト Peatix(要事前登録) <https://yumenokaibou.peatix.com/>



※新型コロナウイルス感染症拡大により、中止・延期の可能性があります。最新情報は当館ウェブサイトでご確認下さい。

※有料動画配信＝2021年12月頃を予定。詳細情報は当館ウェブサイトでお知らせします。

演出 ルカ・ヴェジェッティ

出演 長山桂三(シテ) 森常好(ワキ) 観世鍬之丞(地謡) 藤田貴寛(笛) 大倉源次郎(小鼓) 大倉慶乃助(大鼓) 林雄一郎(太鼓)

照明美術デザイン 吉田萌

照明 富山貴之

舞台進行 佐藤深雪

舞台進行補助 武川芳樹

記録写真 今井智己

記録映像 杉田協士 飯岡幸子

川上拓也 壺井濯 松下仁美

企画制作 塚田美紀(世田谷美術館)

制作補助 吉田絵美 鈴木照葉(世田谷美術館)

制作協力 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン

協力 公益社団法人鍬仙会

後援 イタリア文化会館

主催 世田谷美術館(公益財団法人せたがや文化財団)

※本事業は文化庁「ARTS for the future!」補助対象事業です。

※取材・問合せは、世田谷美術館学芸部 塚田美紀までお願いします

【イタリア文化会館 関連トーク】イタリアの芸術伝統と能における「光」

—演出指南書『コーラス、間奏曲、木霊、そして影を表す方法について』(1598年)を導きに

イタリアの舞台芸術や美術の伝統に根ざした美意識をもちながら、日本の能に深く関心を寄せ、すぐれた能楽師たちからも学んできた演出家・振付家のルカ・ヴェジェッティ。そんな彼の眼には、能のなかに日本文化独自の「内的な光」が見える、と言います。「夢の解剖——猩々乱」に出演した大倉源次郎とともに、公演の感想、演劇的空間の「光」をめぐって語りあいます。

◆日時＝2021年10月12日(火)18時30分～20時 ◆会場＝イタリア文化会館アネッリホール ※逐次通訳付 ◆定員＝170名 ◆料金＝無料、要予約。詳細は後日イタリア文化会館ウェブサイトにて ◆出演＝ルカ・ヴェジェッティ(演出家、振付家)、大倉源次郎(能楽小鼓方大倉流十六世宗家) 司会＝塚田美紀(世田谷美術館学芸員) ◆主催＝イタリア文化会館、世田谷美術館 ◆問合せ＝イタリア文化会館 〒102-0074 東京都千代田区九段南2-1-30 (email: eventi.iictokyo@esteri.it) https://iictokyo.esteri.it/iic_tokyo/ja/

157-0075 東京都世田谷区砧公園1-2

Tel: 03-3415-6011(代)

※10時～18時 月曜休(月曜が祝日の場合は翌平日休)

世田谷美術館
SETAGAYA ART MUSEUM

<https://www.setagayaartmuseum.or.jp/>

〈交通のご案内〉

東急田園都市線「用賀」駅下車、美術館行バスA「美術館」下車徒歩3分/小田急線「成城学園前」駅下車、南口から渋谷駅行バスB「砧町」下車徒歩10分/小田急線「千歳船橋」駅から、田園調布駅行バスC「美術館入口」下車徒歩5分 ※閉館後の企画のため、来館者専用駐車場は使用できません。砧公園有料駐車場をご利用下さい

